

知覚は一つのことなのか ー認識論の自然化を徹底した上で知覚論とコラボすると、知覚というカテゴリーの自然さは雲散霧消して知覚の哲学も不可能になるかもしれんよ、ということについて

戸田山和久 (Kazuhisa Todayama)
名古屋大学情報科学研究科

ウィリアム・フィッシュの『知覚の哲学入門』は、知覚の現象的側面と認識論的側面をどのように統合的に扱うか、という具合に知覚の哲学の課題を設定した上で、センスデータ説、選言説などのさまざまな立場とその得失をきれいに整理してくれている。非常に見事な教科書であり、翻訳が出版されたことをとても嬉しく思う。しかし、この本における知覚の哲学の課題設定は、やや保守的なのでは、と思わないでもない。私の発表はこの点に関するものだ。

知覚の哲学と認識論が一つの話題として語られていた（かに見える）センスデータ説のころはともかくとして、その後の展開においては、両者の交流はあまり活発ではなかったように思われる。その間に、認識論におきた重大事件は、外在主義が一つの有力な立場として確立したということだろう（デフォルトになったとまでは、いかに凶々しい私でもよう言わん）。外在主義の一例である信頼性説は、知識は正当化された真なる信念であるという定義は踏襲した上で、信念が正当化されているとは、外界の事実と信念の間に信頼できるつながりがあることだとする。その正当化に知識主体がアクセスできるという条件をはずすわけである。さらにラディカルな外在主義としては、ドレツキ的な「情報の流れ説」が挙げられるだろう。それによると、知識とは情報が原因となって形成された信念ということになる。信念とは何かについてはこれまでさまざまな立場がありうるが、とりあえず、外界の情報入力によって引き起こされ、ある程度汎用的な仕方で行動出力を生み出す内的状態、ということになるだろう。で、このように捉えた知識も、主体によるアクセスのあるなしとは独立に定義される概念になっている。

認識論がこのように内的アクセスおよびそれに伴う現象的側面の重要性が低減する方向で展開してきたことを考えに入れると、次のような疑問が沸いてくる。外界から生存に役立つ情報を取り込むことを知覚とするなら、知覚に現象的側面がつねにあるとは言えなくなるのではないか。逆に、情報取り込みのうち現象的側面をもつものを知覚と呼ぶのだとしても、知覚はあまたある認識論的に重要な情報取り込み方法の一つにすぎないのではないか。もちろん、認識論的側面も現象的側面もともに備えた（ように思われる）何かは、知覚と呼ぶにせよ知覚の一種と呼ぶにせよ、たしかにあるわけで、その二つの側面をどうやって調和させようかと問うことには、もちろん意味はある。意味はあるが、重要な意味があるかは考えてみなければならない。

本発表では、むしろ、外在主義的な認識論をベースにして、その中で現象的側面を

伴う情報取り込みの意義は何だろうかと考えた方が実り豊かなりサーチプログラムなのではないか、と議論する。この考えが正しいとすると、知覚の哲学は一つの分野であることをやめて、情報論的な認識論の問いと、われわれの内的状態の中には現象的質をともなうものがあるが、その現象的質はなにをやっとるのだろうか、という問い（つまり意識のハードプロブレムとかいうもの）に分裂するのではないだろうか。そっちの方が、問うてみる価値のある問題ではないか、と論じたい。